

# エダマメ新品種 ゆきね 『雪音(SB1013)』の特性と 栽培の要点

雪印種苗(株)  
千葉研究農場 本多 範久

年次	東京 1)		大阪 2)	
	入荷量	価格	入荷量	価格
平成11年	7,141 <sup>t</sup>	円/kg 660	2,177 <sup>t</sup>	円/kg 533
平成12年	7,301	606	2,029	523
平成13年	6,836	660	1,965	506
平成14年	5,915	714	1,830	565
平成15年	6,513	708	1,651	573

1) 東京都中央卸売市場 青果物流通年報(東京青果物情報センター)  
2) 大阪中央卸売市場青果物流通年報(大阪流通情報協会)

表1 年次別エダマメ入荷数量及び単価(東京、大阪)

## はじめに

エダマメは豊富なタンパク質やビタミン類、カルシウムなどを豊富に含む栄養価の高い健康野菜であり、また、ビールのつまみなどとして、その需要も着実に増し、しかも夏期間だけでなく、周年消費される傾向にあります。

一方、生産者サイドからみると、栽

培管理が比較的容易で、水田転換畑利用野菜としての適応性が高く、また、ここ数年、市況単価が高値安定で推移していることもあり(表1)、生産意欲は高まっておりますが、生産者の高齢化や人手不足

などに伴い、収穫労力の負担が大き



写真2 『雪音(ゆきね)』の草姿、着莢

く、なかなか拡大生産が進まないのが現状です。

弊社では、古くからエダマメの品種改良に着手し、中晩生種では「サヤニシキ」を発表し、各地域で好評を頂いておりますが、生産者からは、より多収で、食味に優れる品種の要望が強く、本年、中晩生新品種として『雪音(ゆきねSB1013)』(農水省種苗登録申請中)を発表しましたので、以下、本品種の特性および栽培の要点についてご紹介致します。

## 『雪音(ゆきね)』の品種特性(写真1・2)

### 1) 熟期

開花期はサヤニシキより約4日程度遅いが、エダマメ適期はほぼ同程度の



写真1 『雪音(ゆきね)』の草勢



写真3 『雪音(ゆきね)』の莢の形状

中晩生種です。開花後約30日前後で収穫適期を迎えますが、天候によってその日数は変動します。

本種は秋ダイズ(日長感応型)と夏ダイズ(温度感応型)の中間型となり、極端な早播きは倒伏やつるぼけの原因になりますので、注意が必要です。

## 2) 草姿

草丈はサヤニシキより10cm程度高く、約100cm前後となり、大変強い草勢をしています。莖は太く、根張りが強く、葉も繁りますが、やや倒伏しやすい欠点があり、肥培管理面での注意が必要です。主莖節数はサヤニシキより2節ほど多い16節前後、分枝の発生も6本程度の一次分枝がでます。

が強く、葉も繁りますが、やや倒伏しやすい欠点があり、肥培管理面での注意が必要です。主莖節数はサヤニシキより2節ほど多い16節前後、分枝の発生も6本程度の一次分枝がでます。

## 3) 莢の形質 (写真3)

サヤニシキよりやや小莢でやや淡色ですが、ふくらみ良好で、ボリューム感があり、市場で高い評価が期待できます。毛茸は白毛で、茹であがりの色はきれいな鮮緑色となります。

## 4) 食味 ~甘く、おいしい!~

育成の過程で食味の良いエダマメを利用しているため、甘味に優れ、食味は非常に良好です。中晩生品種の中でも甘み、香りが強い傾向があり、産地でも評価を頂いております。

## 5) 収量性 ~多収型の品種!~(表2)

サヤニシキを含む他の中晩生種より着莢数多く、多収傾向にあります。一般に、中晩生種は早生、中早生種と比べて3粒莢の割合が低く、本種について

表2 エダマメ品種の特性及び収量性

品 種	開花	収穫	主 莖			2粒莢		平均	規格内	3粒
	期 (月/日)	適期 (月/日)	主莖長 (cm)	節数	分枝数	莢長 (cm)	莢幅 (cm)	一莢重 (g)	収量 (kg/a)	莢率 (%)
H15/6/10、H16/6/10、H17/6/13播種(3ヶ年平均) 露地栽培 <岩手>										
雪音(ゆきね)	8/7	9/11	53.6	16.0	6.2	5.75	1.44	2.72	96.9	10.9
サヤニシキ	8/3	9/10	51.0	13.3	3.8	6.20	1.56	3.38	92.6	8.3
H14/6/22、H15/6/24、H16/6/23播種(3ヶ年平均) 露地栽培 <千葉>										
雪音(ゆきね)	8/5	9/4	39.1	13.4	5.1	5.63	1.39	2.47	96.6	12.9
サヤニシキ	7/29	9/4	38.4	11.0	3.5	6.14	1.46	2.66	89.6	12.8

試験場所：雪印種苗(株)千葉研究農場：千葉県千葉市、雪印種苗(株)北上現地試験圃：岩手県北上市

地域	作型	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
東北 高冷地	露地		●—●	●—	—	■		
一般地	露地		●—●	●—	—	■		

●—●：播種期    —：生育期    ■：収穫期

■ 図1 『雪音（ゆきね）』の適作型

ても約10%程度ですが、A品扱いとなる2粒莢が多く、規格内収量は平均で800～900kg/10a、良好な年では1,000kg/10a以上の収量が期待できます。

### 適応地域および播種適期(図1)

- 1) 北東北(青森、秋田、岩手)  
6月上旬～6月下旬
- 2) 南東北(山形、宮城、福島) および  
高冷地(群馬等)  
6月上旬～7月上旬
- 3) その他地域(関東以西の平地地)  
6月上旬～7月中旬

### 栽培のポイント

#### 1) 作型および適地域

本種は8月下旬～10月上旬にかけ

て収穫適期を迎える作型で、最も特性を發揮する品種です。この時期は中晩生品種が中心に利用され、主要な産地は東北地方や群馬などの高冷地です(表3)。

過度の早播きは倒伏やつるぼけの危険があるため、適期播種を心掛けます。また、栽培期間を通じて高温となり、初期生育時からの病虫害の問題や、特に開花時期の高温、乾燥による着莢不良の危険性があるため、栽培管理の徹底が必要です。

#### 2) 栽植密度および肥培管理

前述のとおり、本種は大変樹勢の強い品種ですので、あまり樹を作り過ぎてしまうと着莢数が減り、収量も低下してしまう、つるぼけの心配がありますので、栽培面での注意が必要です。適正な栽植密度は畝間70cm前後、株

間25～30cmです。過度の密植は茎葉部の徒長を招き倒伏の危険性が高まります。また、1株2本立てにしますと収量は多くなりますが、その分、規格外莢(不稔莢、1粒莢、病虫害莢、傷莢など)が増え、品質劣化の原因となるので、1株1本立て(2粒点播)をお勧めします。結果的には、規格内率が高まり、作業効率も上がります。

一般に、エダマメは根部に根粒菌を着生させるため、窒素肥料を多量に施肥する必要はありません。窒素肥料の多用は茎葉部の発育・生長を旺盛にさせるため、つるぼけを起こす原因となります。その畑の地力によって生育差は生じますが、一般的には、窒素成分で3～5kg/10a程度が本種にとって標準となります。リン酸については12～18kg/10a、カリについては12～15kg/10aが標準です。

エダマメの場合、追肥は基本的に必要ありませんが、生育初期の大雨による肥料の流亡など特殊な場合については、開花前までにNK肥料で、基肥の1～2割程度施肥します。

#### 3) その他の栽植管理

作型的には露地栽培が中心となりますが、露地栽培の場合は土寄せを行うのが一般的です(写真4)。土寄せの目的は①倒伏を防ぐ、②地表層の断根

■ 表3 月別、産地別エダマメ入荷数量及び単価

(単位=t、kg当り円)

区分	年計		5月		6月		7月		8月		9月		10月	
	数量	単価	数量	単価	数量	単価	数量	単価	数量	単価	数量	単価	数量	単価
群馬	1,924	791	2	1,243	158	669	693	797	780	702	233	1,137	57	821
千葉	1,116	641	45	1,477	368	818	514	527	150	322	2	874	38	733
埼玉	697	590	17	1,466	209	741	331	507	133	440	4	947	2	475
秋田	656	613					58	459	276	509	238	776	85	600
山形	631	832				582	29	951	281	782	273	917	41	560
静岡	248	1,438	67	1,745	66	1,068	20	755	1	506	1	1,051	12	1,257
青森	244	640				1,044	18	730	75	589	109	727	42	465

(注) 台湾産は除く

東京都中央卸売市場 青果物流通年報(前述)



写真4 土寄せの様子

によって根張りを深くさせる、③通路の除草などありますが、特に本種をはじめとする中晩生種は倒伏しやすいので、土寄せによって防ぐ必要があります。土寄せを行う場合は、開花前までに行うようにし、できれば1回で行うより2回程度に分けて、一度にあまり土を移動させないように注意します。

6月播き、8月下旬以降の収穫では、栽培期間を通じて病虫害の発生が最も多い作型となるので、十分な病虫害対策が必要です。特に開花期以降の防除は茎葉全体が繁茂し、内側までの散布効果が悪く、また、作業効率も悪くなるので、初期生育時からの早期防除が大変重要です。

#### 4) 収穫と調整

エダマメの収穫適期はあまり長い期間とすることは難しく、本種についても、食味を考えた場合、適期収穫を心掛ける必要があります。

手もぎによる収穫・調整作業はエダマメ栽培の中で最も労力を伴う場ですが、実入りの良好な2～3粒莢をA級品として、見栄えの悪い莢（B級品）との規格分けを徹底しないと市場評価は下落します。最近、生産規模拡大のため収穫調整機（莢もぎ機）の導入を図っている産地が増えていますが、手もぎ出荷同様、機械収穫に伴う傷莢の選別の徹底が重要となります。

また、高温期の収穫、調整作業では、速やかに品温を下げる必要があります、予冷庫の準備など品質面での鮮度保持が極めて重要です。

## むすび

今回、ご紹介した『雪音（ゆきね）』は、東北・高冷地における露地栽培の莢もぎ出荷に向く、分枝、着莢の多い多収型の中晩生エダマメです。本種の特徴を生かし、また、栽培のポイントを良く理解して頂いて、荷されることを期待しております。